

人文会ニュース

2012.4

書店現場から

代官山の記憶——街に本屋は生まれ、育つ …………… 薬師寺紋子 1

15分で読むイギリス …………… 新井潤美 7

ぼってん としょかん (battenn toshokann) …………… 田中榮博 17

2011年研修旅行報告

112

<http://www.jinbunkai.com>

ガバナンス

「統治」を創造する

新しい公共／オープンガバメント／リック社会

西田亮介・塚越健司（編著）谷本晴樹・淵田仁・吉野裕介
藤沢烈・生貝直人・イケタハヤト・円堂都司昭（著）

「統治」を創造する
Governance
政治の分業
政治学から見る「統治」

東浩紀
佐藤尚之
駒崎弘樹

オープンガバメントを軸に震災&ハクテイビズム以降の社会設計の潮流を見極め、高度情報化社会における多様な変化と個人の可能性を分析し提案。

1890円

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6
☎03-3255-9611 (価格に税込)
<http://www.shunjusha.co.jp/>

慶應義塾大学出版会
<http://www.keio-up.co.jp/>

貧者を愛する者

—古代末期におけるキリスト教的慈善の誕生

ピーター・ブラウン著／戸田聡記

キリスト教社会において美徳とされる「貧者への愛」は、紀元4〜5世紀に誕生し、キリスト教会を中心とした新しい社会システムを創成する新機軸となった。古代末期研究の泰斗、ピーター・ブラウンが独自の視点で読み解く。

●3990円

神の子 洪秀全

—その太平天国の建設と滅亡

ジョナサン・D・スペンス著／佐藤公彦訳

19世紀半ば、中国全土を14年間の内乱に巻き込んだ一人の男。その実像を新資料に基づく緻密な分析と精神世界にまで踏み込む大胆な筆致によって、壮大到物語る大著。

●6930円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

日本・スペイン外交秘史
ついに翻訳刊行！

フランコと 大日本帝国

フロレンティーノ・ロダオ
深澤安博^譯訳

1939年、内戦に勝利したフランコ政権は当初、熱烈な日本讃美の念を表明していた。しかし太平洋戦争の最終局面では、日本に対し宣戦布告寸前にまでいたる…。その過程にいったいなにがあったのか？スペイン政府の協力のもと構築された日本の対アメリカ諜報網の全貌、フィリピンにおける日西両国の利害の錯綜など、第2次大戦下の知られざる現代史を発掘。

A5判 ●5775円(税込)

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町1-11
Tel.03-3518-4940
<http://www.shobunsha.co.jp>

米村千代・数土直紀 編

社会学を問う

規範・理論・実証の緊張関係

社会学を問う
米村千代・数土直紀 編

A5判上製248頁
2940円

「社会学」を積極的に解体し、そして批判的に構築する。盛山和夫門下の13人が、それぞれの専門を通じて、社会学のあるべき姿を問う。

*価格税込

勁草書房 TEL 03-3814-6861
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
<http://www.keisoshobo.co.jp>

薬師寺紋子

代官山にTSUTAYAを作るといふ話は社内でもほとんど都市伝説であった。二〇〇八年頃からよく耳にするようになっていたその噂話は、二〇〇九年の代官山プロジェクト発足で現実味を帯びた話となり、二〇一一年十二月五日に代官山蔦屋書店はひっそりとオープンした。この社運をかけたプロジェクトの中で私達がやってきたこと、今後やろうとしていることについて私
が知っていることを幾つか記してみようと思う。

あれは確か二〇〇九年十一月下旬。「代官山で週に一度行われている会議に出席すべし」という上司からの指示を受け、私は当時勤務していた六本木から代官山へ週に一度通うことになった。代官山という場所は私に直ぐにあの都市伝説を想起させたものの、何を準備すれば良いかも分からないので一先ず期待と緊張だけを抱えて私は代官山へ向かった。

そこで行われていたのは、都市伝説でも何でもない、代官山に前代未聞のTSUTAYAを作るといふ本気の話し合いであった。しかしいっただい何が決まっています何が決まっていないのか、私は何を期待されてここにいるのか、その質問に答えてくれる人はいなかった。つまり、何も決まっていなかったのである。「代官山にTSUTAYAを作る」ということ以外は何も。

私達は全てを決める必要があった。誰に向けて何を提案するのか。どういふ建物を建てる為に、

どの建築家を採用するのか。どういう店を誘致し、どう配置するのか。TSUTAYAではどのアイテムを扱い、何を提案するのか。どういうジャンルの本を扱い、どう並べるのか。どういうサービズを実現する為に、どういうシステムを開発するのか。店の名前、制服、ブックカバー、販売袋、新規採用、育成方法——などなど。TSUTAYAとしての既成概念を捨て、全てをゼロから考えることが許されていたし、重責として課されてもいた。

何よりも先ず誰に何を提案するのかを決める必要があった。

一九八三年枚方市にTSUTAYA一号店はオープンした。若者へ向けて文化を発信してきた。誰でも気軽に映画や音楽を借りたり買ったりできるようになった。一九九三年には雑誌・書籍の販売も始めた。二〇〇三年にはブック&カフェを始めた。しかし、一九八三年当時二五歳だった若者は現在五三歳になっている。彼等が今楽しめるTSUTAYAはあるのか？ そんな思いと反省から、代官山のイメージターゲットは五〇〜六五歳の人々、中でも「大人を変える大人」と決まった。私達が「プレミアエイジ」と呼ぶ人々である。

その先は、チームが編成された。不動産のチームとTSUTAYAのチームに分かれ、TSUTAYAのチームは更に映画、音楽、本のチームに分かれてそれぞれ何を提案するのかを考えた。本のチームは六人。この頃には私も正式にプロジェクトに着任していた。毎日あだこうだも議論をした。私生活でも本を買ったり借りたり読んだり集めたりすることが好きな人間ばかりが集まっているのだ。「行きたい本屋」を妥協なく考えることは楽しいことであった。しかし好きだからこそ、「お前さんが何と言おうとこれだけは譲れないね」というこだわりも各人にある。しかも前職も様々な人間が集まっているので議論の手法も様々で、時には議論が険悪な雰囲気になるこ

ともあった。どれだけ個人のこだわりが強かろうと、私達が最後に立ち戻るのは「お客さんがそれを望むのか」というただその一点であって、その共通認識が私達をチームとして成立たせる唯一の柱であったと言っても言い過ぎではない程に本当にユニークなメンバーが集まっていた。今思えばどうでもいいことで笑ったり、どうでもよくないことで怒ったり、賑やかな日々であった。

ここでは書き尽くせないが、闘う相手は多かった。負けることの方が多かった。叶わない願いも多かった。納得できないことも多かった。私達がやろうとしていることは商売であって慈善事業ではないので、いつでもそうできる訳ではなかったが、それでも常に一番良いと思えることを選択しようと思えた。そうして本の売場のコンセプトは「時間と空間を超えて今読まれるべき本をアーカイブした世界に誇れるブックストア」に決まった。

そこからは様々な業務やジャンルの担当者を決め、各人が黙々と作業を進めていった。

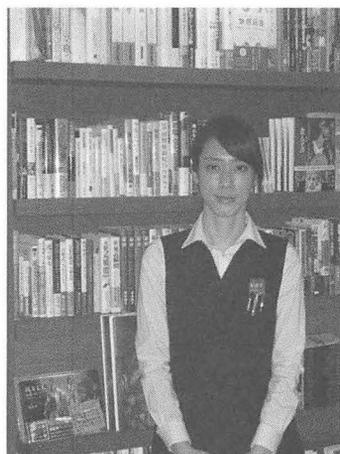
ジャンルを持つ者は什器と内装の要件を出し建築家と協議を進めながら商品リストを作るという毎日が続いた。これが何より苦しい記憶として残っている。本の収容冊数が決まらない中で商品リストを積み上げていかねばならないのである。足りないよりは後で削る方がましだと冊数を積み重ねるのだが、書名、ISBN、出版社、本体価格をエクセルに入力していくという作業は思った以上に時間がかかる。「オープン日に本が足りない！」という悪夢を何度も見た。そうかと思えば、私達が死守したい最低冊数すら収容できない什器の図面があがってきては建築家に突き返す、そんな日々が続いた。実はそれは、最後の最後まで続いた。

同時に、洋書の担当者は海外のブックフェアへ行き口座開設の交渉にあたった。古書の担当者は海外の古書市へ行き古書の買付にあたった。私は人文の商品リストを作りながら、この古書買

付出張にも同行した。新刊書店で働いてきた私にとって、そこはワンダーランドであった。本の中で見たことしかない本が、目の前にある。存在を想像すらしたことのない美しい本が、目の前にある。本は記憶だ。古書が秘めている記憶は、実際に手に取りページを開いてみないと聞こえてこない。本は本自身の運命を生きながら、いつか手に取る誰かを待っている。それは私でなくてはいけない。そんなほとんど恋とも呼べる思い込みで、私は土産代をすっかり自分の為に使い果たしてしまった。そんな私を捕まえて、先輩は代官山に置くべき古書とはどういうものか、古書を買って付ける時には何に気を付けるべきか、そういった知識を教えてくださいようとするのであったが、恋は盲目なので、私には商売として古書を扱うのは向かないなあとい異国のホテルで毎晩落ち込んだものである。

それ以上に落ち込んだのは人文会向け説明会を終えた夜だ。TSUTAYA直営店が人文書を本格的に扱うのは初めてのことであるから、人文会向けに代官山の概要を説明した方が良いという助言を頂き、人文を担当する私がそれを開催することとなった。

二〇一〇年七月二六日、日販本社に会場を借り開催した代官山説明会には二〇社の会員社の皆様に御出席頂いた。突如人文を扱うなど言い出したTSUTAYAの小娘に対して、エイリアンを見るかのような視線が浴びせられているのを自覚してはいたが、逃げ帰る訳にも行かず、私は準備していた資料を一通り説明した。そして質問を募った。その質問は、社内で議論をしているのも決して湧いてこないような類の質問である。答えながら、自分の考えが如何に突飛なるものであるか、それを実現するだけのしつかりとした計画もなく、知識・経験不足からくる暴走であることを痛感した。しかしその痛みを分かち合える相手はいない。私は社に戻り、無事終わっ



筆者 近影

ただ、ただだけを上司に報告し、その後は一人で考え抜くしかなかった。その夜はとことん落ち込んだ。人文会の皆様に頂いた厳しくも有難い御意見や御指摘を何度も何度も振り返り、できることを探そうとした。やりたいことが空回りする音と時計の針が進む音だけが部屋に響く。本の声を聞かなくてはと思った。その夜は考えることを止め、大好きな本を読み睡魔に身を委ねることにした。本はその夜の私を穏やかに包み込み全てを記憶することを約束してくれた。そしてまた在庫が足りない夢を見て、早朝に汗びっしょりで目を覚まし、九州の実家へ帰った。それから二週間は会社を休み、両親が入院する二つの病院と実家を行き来しながら深夜に商品リストを作った。二、三日東京へ戻り、上司に進捗を報告し、また実家へ帰る、そういう生活が三ヶ月続いた。その間、みず書房の田崎様には大変お世話になった。電話とメールでやり取りを行い、人文会の皆様との全てのやり取りをまとめて下さった。本当にお世話になった。この場を借りて全力で御礼申し上げたい。有難う御座いました。勿論、その他の方々からも「こういう本を読むと良い」、「こういう方法があるのではないか」など様々な助言を頂いた。それはどれだけ力強く私を支えて下さったことだろう。本屋は本屋だけでは作れない。著者がいて、編集者がいて、装丁家がいて、印刷屋がいて、営業がいて、書店員がいて、読者がいて、街に本屋は生まれ、育つ。本が記憶なら、本屋は記憶を宿す場所だ。私達は、その場所を新しく生み出そうとしている。その意義を、心の真ん中で感じた三ヶ月であった。

「こういふ方法があるのではないか」など様々な助言を頂いた。それはどれだけ力強く私を支えて下さったことだろう。本屋は本屋だけでは作れない。著者がいて、編集者がいて、装丁家がいて、印刷屋がいて、営業がいて、書店員がいて、読者がいて、街に本屋は生まれ、育つ。本が記憶なら、本屋は記憶を宿す場所だ。私達は、その場所を新しく生み出そうとしている。その意義を、心の真ん中で感じた三ヶ月であった。

さて、その後の搬入の慌ただしさは書店員の皆様であれば想像がつくと思うので省略することとして、これから私達がやろうとしていることを一つ記してみようと思う。

私達は、この代官山蔦屋書店で、「コンシェルジュ」を務めている。雑誌、人文・文学、アート、建築、車、料理、旅行のコンシェルジュが店内に常駐し、人と本が出会うきっかけを用意している。私達は、最後は人だと信じている。人が語り継いできた記憶を本に託したとしても、本は自ら話せないし歩けない。人の方から本屋に来てもらって、本を手にとってもらわなければならない。その気にさせる人、それが私達コンシェルジュということだ。まだまだ勉強不足、知識も経験も足りないが、それでも一つ言えることは、私達は進化を続ける覚悟があるということ。その覚悟を、末永く見守って頂きたいと願っている。

(やくしじあやこ・代官山蔦屋書店)

十五分で読むイギリス

昨年はチャールズ皇太子と故ダイアナ妃の長男、ウィリアム王子とキャサリン・ミドルトン妃との結婚式、今年にはエリザベス女王の戴冠六十年記念、そしてロンドン・オリンピックと、イギリスはイベント続きである。また、去年はエリザベス女王の父親のジョージ六世を描いた映画『英国王のスピーチ』がアカデミー賞をいくつかのカテゴリで受賞して話題を呼んだほか、今年はずつとサッチャー首相をアメリカの女優メリル・ストリープが熱演した映画『マーガレット・サッチャー——鉄の女』が公開された（日本では今年三月に公開予定）。イギリスは今注目を浴びている。

とは言え、日本の読者にとってイギリスは昔から常に興味の対象であったようだ。同じ島国であり、車のハ

新井潤美

ンドルも同じ側であり、礼儀正しいが、知らない人と簡単に打ち解けないといったイギリス人のステレオタイプにも、日本人と似たところがある。私は教育のほとんどをイギリス、あるいはイギリス系の学校で受けていたが、家にある日本語の本もよく読んでいた。日本文学や日本に関するエッセーも興味深かったが、日本人がイギリスについて書いている書物もまた違う意味で興味深かった。その多くは自分や配偶者の仕事の関係でイギリスに住んだ経験のある著者が、自分のイギリス体験をもとにして書いたものであり、彼らが住んでいた場所、接していた人々のエスニシティや階級、住んでいた期間によって、実にさまざまなイギリスの姿を書いていた。特に一九七〇年代にそのようなエッセーが多く出版されて

いたようだ。ただしこれらの書物は逆に言うと、「自分の経験だけでイギリスを語ってしまう」ものとして批判されていたのも事実である。これは別に日本人がイギリスを語った場合に限らず、イギリスでも「わずか数か月の滞在で、その国すべてを知ったように語る著者」による旅行記や滞在記が昔から批判の対象となっていた。例えば今年で生誕二百年を迎えるイギリスの小説家チャールズ・ディケンズ(一八二二―一八七〇)は、イギリスでもアメリカでもたいへん人気のある作家だったが、一八四二年の一月から六月にかけてアメリカを旅した後に書いた旅行記『アメリカ紀行』(一八四二年)は、偏見に満ちているとしてアメリカ人の読者に不評だった。

ただしイギリスでは昔からフィクション、ノンフィクションを問わず旅行記が盛んに書かれており、それらの旅行記に書いてあることは、その大部分は筆者個人の経験を書いたもの、あるいはときには想像の産物でさえあることは、読者は十分承知している。旅行記に関しては日本でも事情はそう変わらないだろう。しかし仕事で日本人が海外に住むことが多くなつた一九七〇年代からは、「旅行者でなくて、住民だからこそわかる、内側

からの〇〇」といった書物が増えていき、特にこの「〇〇」が他の国よりもイギリスであることがなぜか多いようだ。問題なのは、隣人との関係や子供の学校一つ挙げても、その地域の住民の社会的階級とエスニシティによつて、まるで別の国について書いているような違いが生じることだ。著者が書いていることが、たまたま彼らが触れたイギリスのほんの一面であることを読者も承知して読んでいればそれはそれで面白いのだが、やはりこの種の書物の特色として、「イギリスはこうだ」と思い切りよく言い切ることが要求される。すると、また別の、「内側からの」イギリスを知っていると自認する読者や別の著者から「いや、こんなのは本当のイギリスではない。私が知っているイギリスこそ本物だ」といった批判が向けられたりするのだ。

例えば一九七七年に大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した木村治美の『黄昏のロンドンから』(PHP研究所)に対して、「ここは事実と違う」といった指摘の記事が雑誌に掲載されたりした。「イギリス人はプレゼントをもらったらその場でばりばりと包み紙を破ってあげると書いてあるが、クリスマス・プレゼントの場合は普通は

クリスマスまでとっておくものだ」と言ったかなり細かいことが書かれていたのを覚えている。この種の本はあくまでもその人の経験したこととして目くじらをたてずに、その著者の感想やそれを書き表す文体を楽しむべきものなのだろう。

その意味では林望の『イギリスはおいしい』（平凡社、一九九一年）は、首をかしげたくなくなる箇所もいくつかあるが、そのユーモアたっぷりの軽快な口調から旺盛な好奇心と研究心が伝わってきて、興味深く読める。同様の「体験もの」としては、安部悦生の『ケンブリッジのカレッジ・ライフ——大学町に生きる人々』（中公新書、一九九七年）も、他のケンブリッジ大学在学経験者から「事実と違う」といった批判もあったそうだが、筆者自身があとがきで「このような個人的な、あまりにも個人的なイギリス体験」と述べているように、一年半ほどのケンブリッジ大学留学で見聞きしたことを率直に書いた好著である。

めずらしい体験をもとにしたイギリス論としてはマックス寿子の『英国貴族と結婚した私』（中公文庫、一九九五年）が面白い。この作者の書く「イギリスもの」の多く

は、日本を非難してイギリスを礼賛しているとして批判を受けることが多いようだ。しかし、イギリスの大手チェーンストア、マークス・アンド・スペンサーの創始者の一人マイケル・マークスの孫の二代ブローン男爵との結婚を中心に、イギリスでの生活を綴ったこの本は、日本人でありながら結婚して「レイディ」の称号を得てイギリスで暮らすことになった著者のとまどいや苦勞が鮮やかに描かれていて、イギリスにおける「称号」の持つ権威、外国人への根強い懐疑心などがよく伝わってくる。自らを「レイディ」と名乗ることに抵抗をおぼえ、謙遜のつもりで「ミセス」と名乗っていたら、「お宅にはレイディ・マークスとミセス・マークスがいらっしゃるようだが、どういうことか」と警察から問い合わせがあったり、「レイディ」と名乗ったら名乗ったで、信用されなかったりなど、興味深いエピソードが書かれている。

また、さらにユニークな体験記としては、映画監督リドリー・スコットのハウスキーパーを勤めた、高尾慶子の『イギリス人はおかしい——日本人ハウスキーパーが見た階級社会の素顔』（文藝春秋、一九九八年）があ

る。いわゆる「イギリス在住作家」の大部分がミドル・クラス（ロウワー・ミドルからアッパー・ミドルまで様々ではあるが）の社会に入っていく、そこで体験したことを書いているのに対して、この著者は「使用人」という、ワーキング・クラスの立場から見えてくるイギリス、特にその階級社会を書いている。また、タイトルからもわかるように、イギリスというと、「礼賛もの」が多い中、あえてイギリス批判の立場で書いたことが強調されている。独断や偏りも含まれているが、実際の経験から来る面白さがある。

しかし、このような「イギリス体験記」の中でも（と言っても、実はそう多くを読んでいるわけではないが）やはり今でも最もバランスよく、冷静に、そして適切に書かれていると思われるのは森嶋通夫の『イギリスと日本——その教育と経済』（岩波新書、一九七七年）である。以前この本のことは『私のすすめる岩波新書』という紹介本で書かせていただいたことがあるが、私が読んだ初めての新書だった。ちょうど冒頭に書いたように、一九七〇年代、イギリスの中学生か高校生だった頃に、両親の本棚にある「イギリス本」を読み、中でも最も当時のイギリ

スの文化と教育のありかたをわかりやすく、そして正しく言い当てている本として非常に感銘を受けたのを覚えている。岩波の原稿を書く際に、何十年ぶりに読み返したのだが、印象は変わらなかった。題名はいささか固いが、講演と新聞に連載された談話をもとに書かれているということからも、たいへん読みやすく、わかりやすい。そして著者の体験に基づく具体的な例も紹介されているから、それが決して独りよがりではなく、さらに著者のはっきりとした信念と、一種の品格とも言うべきものが伝わってくる。「イギリスに関するいい本はありませんか」と学生に尋ねられると必ず今でも推薦する本である。ここで少し角度を変えて、いわゆる「専門家」、つまりイギリスの文学、歴史、文化の研究者による文献にも触れたい。「イギリス文化事典」の類は少なくないが、ミネルヴァ書房の『イギリス文化55のキーワード』（二〇〇九年）はペーパーバックで手軽に読める。「王室」、「奴隸」、「階級」、「ジェントルマン」、「ギネスブック」、「シェイクスピア」、「ビートルズ」、「パブリック・スクール」、「パブ」、「マダム・タッソー蠟人形館」といった、多くの時代、分野からの「キーワード」をそれ

それ四、五ページで解説したもので、図版も多く、参考文献表もついでいて、「イギリス入門書」としてよいかもしれない。イギリス文化の各分野について、もう少し掘り下げたものとしては、やはりミネルヴァ書房から出版されている『ヘインテリア』で読むイギリス小説——室内空間の変容』(二〇〇三年)、『食』で読むイギリス小説——欲望の変容』(二〇〇四年)、『衣装』で読むイギリス小説——装いの変容』(二〇〇八年)が文字通り、イギリスの「衣食住」を様々な観点から扱っている。タイトルは「小説」となっているが、演劇やエッセー、児童文学なども材料としてとりあげ、イギリスの文化をわかりやすく解説したものとなっている。さらに、過去から現在にかけてのイギリスの文化の様々な面をたいへん興味深く書いたものとして、角山栄、川北稔編集の『路地裏の大英帝国——イギリスの都市生活史』(平凡社、一九八二年)は推薦できる。

ところで本国イギリスで今新たに注目を浴びているのは「使用人文化」である。イギリスでは第二次世界大戦までは、「ミドル・クラス」を自認している家庭では使

用人が少なくとも一人は必ず雇われており、使用人はイギリスの生活における重要な部分だった。しかし戦後になって、大部分の家庭から使用人の存在が消え、執事や乳母、ハウスキーパーに料理人と言った使用人がフィクションの世界のものだけになってしまっただけから、彼らの存在やイメージが、「古き良き時代のイギリス」を象徴するものとして美化され、ノスタルジックに追求されるようになった。

一九七〇年代には、二十世紀初頭のロンドンを舞台にした、『アップステアーズ・ダウンステアーズ』というドラマシリーズが大ヒットした。それ以降は、ヒット・ドラマはもっぱら、ロンドンに住む郊外のミドル・クラス、しかもロウワー・ミドル・クラスを題材にしたシチュエーション・コメディや、ロンドンに住む、様々な階級の若者を取りあげたものなど、時代を象徴するもの多かったが、二〇〇一年に『エドワード朝のカントリー・ハウス』(邦題は『マナー・ハウス』)というテレビ番組が話題を集めた。これは「リアリティ・テレビ」と呼ばれる、視聴者参加型の番組で、イギリスで最も人気のあるジャンルの一つである。あるシチュエーション

を設定し、視聴者の中から参加者を募り、数週間から長くは数か月間共同生活をさせて、その状況を録画するといったものだ。この種の番組で一番人気があり、イギリスでは毎日のように放映されているのは『ビッグ・ブラザー』という番組で、二〇人ほどの男女が数か月間共同生活をして、定期的に採決をして同居人の一人を追い出す。この番組そのものは実はイギリスで始まったものではないが（最初はオランダで放映された）、イギリスでは次から次へと似たような番組が作られ、イギリスの大衆向けテレビ番組の典型として悪名高い。特に多いのがある特定の時代——例えば「ヴィクトリア朝」、「二十世紀初頭」、「戦時中」——のイギリスを再現し、視聴者の中から希望者を募って共同生活を送らせるというものである。中でも人気のあった『エドワード朝のカントリー・ハウス』では、一九〇五年のイギリスのカントリー・ハウスの主人とその家族、そして使用人、あわせて二〇人程のメンバーが、それぞれの役割を果たしながら、百年以上も前の生活を試みた。見ず知らずの人間がいきなり共同生活を始める。しかも、使用人の役の若者は、現代のイギリスではあまり体験できないような厳しい規律と

上下関係の世界に入っていくのだからトラブルが絶えない。リアリティ・テレビの特徴である、人間関係のもつれ、涙、罵倒をカメラが追っていく。けっして趣味の良い番組ではないが、当時の使用人の生活や仕事の内容、役職などについては当時の使用人用マニュアル、使用人を扱った解説書や研究書を参照してあり、忠実に再現されていた。

そしてさらに二〇一〇年にイギリスの民間放送ネットワークで放映されたドラマシリーズ『ダウントン・アビー』によって、再びイギリスでは「使用人ブーム」が起こった。このドラマは、ロバート・アルトマン監督の、カントリー・ハウスを舞台にしたアガサ・クリスティ風のミステリー映画『ゴスフォード・パーク』の脚本を書いた、アッパー・クラス出身の作家ジュリアン・フェロウズの筆によるものである。一九一〇年代のイギリスの伯爵家とその家の使用人の生活を描いたもので、主人と使用人、階級、女性の役割などがだんだんと変わっていく、新しい時代の到来にとまどいながらも、順応していくという人々の姿をユーモラス、かつドラマチックに表して、非常に人気を得た。その結果、第一次世界大戦

下のイギリスを描いた第二シリーズも放映され、現在は第三シリーズの準備が進められているという。『ダウントン・アビー』の人氣に触発されたのか、『アップステアーズ・ダウンステアーズ』も二〇一〇年に、約三〇年ぶりに「クリスマス特別版」が放映された。

イギリスでは使用人に関する本が多く出版されているが、その中でも優れた著書で、日本語版でも手に入るものとして、パメラ・ホーンの『ヴィクトリアン・サーヴァント——階下の世界』(子安雅博訳、英宝社、二〇〇五年)がある。これは「使用人の黄金時代」と言われる、十九世紀のイギリスの使用人の生活や在り方を詳細に紹介した、わかりやすい著書となっている。また、使用人自身が書いた手記を訳したものとして、マーガレット・パウエル作『英国メイド——マーガレットの回想』(村上リコ訳、河出書房新社、二〇一一年)がある。これは一九六八年に『階下の生活』(*Below Stairs*)というタイトルでイギリスで出版され、キッチンメイドから始めて、最終的には料理人になることに成功した著者の経験を綴った、たいへん興味深い回想録である。さらに、同じ使用人の書いた本、といっても時代も背景もだいぶ違うもの

が、故ダイアナ妃の執事を務めたポール・バレルの回顧録『ダイアナ妃・遺された秘密』(川崎麻生康生・文、ワニブックス、二〇〇三年)である。これは一種の暴露本と言ってもよく、バレル自身も、ダイアナ妃の遺品を盗んだ嫌疑をきせられ、スキヤンダルの中心となった。しかしワーキング・クラスの若者が下男となり、執事に昇格していくという、ワーキング・クラス出身の使用人の理想的な出世コースをバレルが辿っていくさまや、主人との間にけっして越えることのない大きな階級の溝を認識しながらも、階級の違いゆえにこそ、主人が心を許し、信頼する相手となりうる様子など、伝統的かつ典型的な「イギリスの使用人」像が描かれているのが興味深い。

また、使用人そのものに特に焦点を当てているわけではないが、ケイト・サマースケイルの『最初の刑事——ウィッチャー警部とロード・ヒル・ハウス殺人事件』(日暮雅通訳、早川書房、二〇一一年)も、十九世紀のイギリスにおけるミドル・クラスの家の主人と使用人の関係の資料となる。これは実際に起こった迷宮入りの幼児殺人事件を、当時の新聞記事などの資料を作者が綿密に調べてまとめたものである。切り裂きジャックの事件などと同

様、真相は結局解明不可能であるところから、読者としてはどうしてもフラストレーションが残るが、それは仕方のないことだろう。

イギリスの使用人は、日本でも注目を浴びているのは周知のとおりで、いくつかの「メイド本」や「執事本」が書かれているが、なかでも久我真樹の『英国メイドの世界』（講談社、二〇一〇年）は膨大な資料を参照、引用し、項目別に整理した、わかりやすい読み物となっている。

ここ数年イギリスでは、「先祖をたどる」ことが流行っている。例えば『自分を誰だと思っているの？』（*Who Do You Think You Are?*）というBBCの人気テレビ番組は、有名人が自分の祖先をたどっていくものだし、あるいは、相続人不明の遺産の相続者を捜すために、家族のルーツを辿っていくという『相続人ハンター』というBBCの番組もある。こういった番組において行われるリサーチの結果、現在は羽振りの良いミドル・クラスの財産家でも、少し前にさかのぼると、使用人だったというケースが多い。十九世紀から二十世紀にかけて、ワーキング・クラスにとって、労働時間が長く窮屈な生活を強いられたとしても、使用人というのは条件の良い仕事

だった。大きな屋敷に勤めていた場合はなおさらである。今やイギリスの使用人はフィクションの中の存在だと書いたが、同時に使用人文化とは、イギリスのミドル・クラスおよびアッパー・クラスの生活を支える重要な部分なのである。

最後に、やはりイギリスを語る場合に避けて通れないのは多民族国家イギリスとしての姿である。特にイギリスと奴隷貿易の関係については、たとえば私がイギリスの中学、高校で学んでいた一九七〇年代にはあまり語られることがなかった。イギリスにおけるマイノリティに関する文献が多く書かれ、読まれるようになったのは一九九〇年代以降だろう。しかしこれらの文献のうち日本語に訳されているものは、私の知る限り決して多くないし、また、日本で読まれている「イギリスもの」にはあまりその要素に触れているものは多くないようだ。拙著『不機嫌なメアリー・ポピンズ』（平凡社新書、二〇〇五年）では「マイノリティたちのイギリス」という章で、少しマイノリティと文学、映画について触れたが、それはほんの一面である。映画を通して、「イングリッシュネス」、帝国主義、ポストコロニアリズムといったテー

マを分かりやすく論じている本として、大谷伴子他編の『ポスト・ヘリテージ映画——サッチャリズムの英国と帝国アメリカ』（上智大学出版、二〇一〇年）がある。

イギリスは年々、めまぐるしく変わっていつている。

多民族、多文化、多宗教の国としてイギリスは、旧植民地、そしてそれ以外の国からの住民を（制限しながらも）受け入れ、共存している。しかしその一方で、「古き良きイギリス」へのノスタルジーが強くなっていくのも否定できない。『ダウントン・アビー』に見られる、使用人ブームもその表れだろう。イギリスの市民権取得希望者に、二〇〇五年から課せられることになった「イギリスの生活に関するテスト」は批判の対象となってきたが、昔は「常識」と見なされていたイギリスの歴史や文化に関する知識、教養がもはや共有されなくなってきた今日、そのような試みをしたくなる気持ちもわかる。去年イギリスのクイズ番組で、「教員志望」という回答者が、「イギリスにはエドワードという王様はいない」と答えるのを見て仰天したのを覚えている（エドワードという名の王は、即位して一年足らずで、愛する女性と結婚するために退位したエドワード八世を含めて、八人いる）。英語の

文法教育をすっかり受けた日本人のほうが「平均的な」イギリス人よりもよほど文法に詳しいと言われるが、日本で多く出版されているイギリスに関する本を読んでいる日本人のほうがイギリス人よりよほどイギリス文化についてよく知っているという時代も来るのかもしれない。

新井潤美（あらい・めぐみ）

香港・日本・オランダおよびイギリスで教育を受ける。

一九九〇年東京大学大学院博士課程満期退学（比較文学比較文化専攻）。現在、中央大学法学部教授。

主要著訳書：『執事とメイドの裏表 イギリス文化における使用人のイメージ』（白水社）、『階級にとりつかれた人びと 英国ミドル・クラスの生活と意見』（中公新書）、『不機嫌なメアリー・ポピンズ イギリス小説と映画から読む「階級」』（平凡社新書）、『自負と偏見のイギリス文化——J・オースティンの世界』（岩波新書）、ドナルド・キーン『日本文学の歴史 近代・現代篇』7・8巻（中央公論新社）、ジェイン・オースティン『ジェイン・オースティンの手紙』（編訳、岩波文庫）

15分で読むイギリス・ブックガイド

出版社	ISBN (978)	書名	著者名	本体 価格	刊行
岩波文庫	4003222966 (上) 4003222973 (下)	アメリカ紀行(上・下)	チャールズ・ディケンズ/ 伊藤弘之他訳	(各) 900	2005
文春文庫	4167232016	黄昏のロンドンから	木村治美	408	1980*
文春文庫	4167570026	イギリスはおいしい	林望	494	1995
中公新書	4121013507	ケンブリッジのカレッジ・ライフ	安部悦生	660	1997
中公文庫	4122024182	英国貴族と結婚した私	マークス寿子	705	1995
文春文庫	4167123093	イギリス人はおかしい	高尾慶子	543	2001
岩波新書	4004200291	イギリスと日本	森嶋通夫	700	1977*
ミネルヴァ 書房	4623054367	イギリス文化55のキーワード	木下卓・窪田憲子・久守和子編著	2400	2009
ミネルヴァ 書房	4623037520	〈インテリア〉で読むイギリス小説	久守和子・中川僚子編著	3200	2003
ミネルヴァ 書房	4623040292	〈食〉で読むイギリス小説	安達まみ・中川僚子編著	3200	2004
ミネルヴァ 書房	4623040513	〈衣装〉で読むイギリス小説	久守和子・窪田憲子編著	3200	2004
平凡社ライ ブラリー	4582763812	路地裏の大英帝国	角山栄・川北稔編集	1200	2001*
英宝社	4269820142	ヴィクトリアン・サーヴァント	バメラ・ホーン/子安雅博訳	3200	2005
河出書房新 社	4309205823	英国メイド マーガレットの回想	マーガレット・パウエル/ 村上リコ訳	1700	2011
ワニブッ クス	4847015335	ダイアナ妃 遺された秘密	ポール・バレル/川崎麻生・文	1700	2003*
早川書房	4152092120	最初の刑事 ウィッチャー警部とロード・ヒル・ハウス殺人事件	ケイト・サマースケイル/ 日暮雅通訳	2800	2011
講談社	4062162524	英国メイドの世界	久我真樹	2800	2010
平凡社新書	4582852738	不機嫌なメアリー・ポピンズ	新井潤美	760	2005
上智大学出 版	4324088678	ポスト・ヘリテージ映画	大谷伴子他編	1800	2010

*は、品切の可能性がります。

ばってんとしよかん (battenn toshokann)

くまもと森都心プラザ図書館館長 田中榮博

0・はじめに

日本に図書館が生まれて、百数十年の歴史の中で、私が図書館に関わってきたのは、その中のほんの数十年です。指定管理者制度を用いた図書館が出現して以来、今、図書館が、どんどん変わってきています。私の前職である千代田図書館とは180度違う日本の端っこで、今回引き受けた「くまもと森都心プラザ図書館」の、特徴と図書館の方向性について、述べてみたいと思います。

1・くまもと森都心プラザの概要

平成23年10月1日、熊本駅前「くまもと森都心プラザ」が誕生しました。くまもと森都心プラザ(以下プラザと省略)は、熊本市による駅前再開発事業のランドマー

クの存在の施設であり、地上6階、地下1階、延べ床面積9568.37㎡の建物です。



くまもと森都心プラザ(平成23年10月撮影)

各フロアは、

1階 食品マーケット、銀行

2階 管理事務室、市民サービスコーナー、観光・

郷土情報センター

3階 プラザ図書館

4階 プラザ図書館、ビジネス支援センター、創業

支援センター、託児室

5階 ホール、ホワイエ・ラウンジ

6階 会議室

の商業・業務施設と公共施設により構成されている複合施設となっており、地元企業6社により構成する「くまもと森都心プラザ管理運用共同体」により運営されています。

2・プラザ図書館と駅活性化

プラザ図書館は、プラザの3階、4階に位置し、施設の中核的な存在となっています。また、館内にはビジネス支援センターも併設するという、全国的にも珍しい構成になっています。図書館の開館時間は、平日9時30分～20時00分、日・祝日9時30分～18時00分であり、開館以来約

20万人のお客様に来館いただきました。（平成24年1月末現在）

さて、このニュースを読んでいる皆さんは、熊本駅前のイメージをどのように想像しているでしょうか。熊本市の場合、市街地というのは熊本駅から路面電車に乗って、10分程度の場所にあります。近くには市役所や、日本で一番多く観光客が訪れる熊本城があります。しかし駅前には複数の予備校と専門学校やホテルがあるものの、私の目には、ほとんどの人は、JRから路面電車やバスに乗り換え目的地に向かうという、いわば単なる通過地点のように思えたのです。プラザ前の歩道橋を、どれだけの人々が通行してもらえるか、それが最初の課題でした。

プラザ図書館を始める前の研修で、展開したのが、

誰のための図書館ですか。

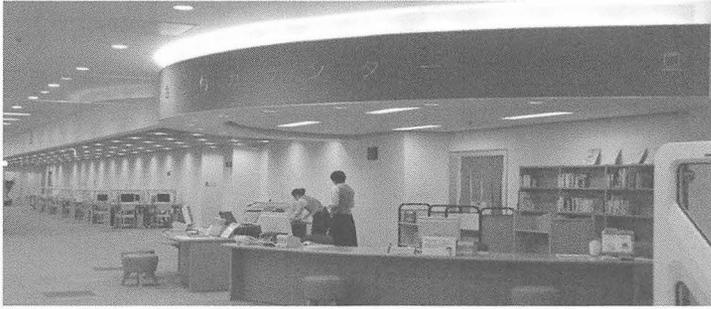
目線は常にお客様目線。

利用者ではなくお客様。

お客様に挨拶をしよう。

ということでした。

私は、図書館という施設は、カウンターの向こう側に



プラザ図書館総合カウンター



朝礼の風景

お客様が居るサービス業であると思っています。言い換えれば、図書館で働く人たちは、司書である以前に、お客様と会話ができる特権を持っている人なのです。それがなぜ、日常的な挨拶ができないのか、それが不思議でなりません。プラザ図書館を引き受けるにあたり、お客様に対する「しっかりとした接遇」、それを図書館の基本姿勢としたのです。

プラザ図書館は、「おはようございます」、「いらっしゃいませ」、「ありがとうございます」、「またどうぞお越しくさいます」。とカウンターからご挨拶をしています。これを私たちプラザ図書館の基本姿勢とし、毎日の朝礼で挨拶の唱和を励行しています。

まるで、ホテルコンビニエンスストアのようですが、ぼってん(けれど)としょかんなのです。

開館当時は、来館される人たちは、怪訝そうな表情でしたが、そのうち、会釈をしていただくようになり、今では、お客様の側から挨拶が返ってくるようになって来ました。

開館後4か月、今では駅前の人の流れも明らかに変化してきたように思えます。

3・プラザ図書館と地域社会

私は、図書館と地域社会は、共に育ち共に競争する間柄でなければならないと思っています。どちらか一方が目立っても、また沈み込んでもいけないのです。

互いに友達であり、良きライバルであるべきだと思っています。正直なところ、熊本駅前ホテルはあっても、日頃利用するショップやレストランが少ない開発途中の地です。そして、プラザの東側には、35階建て(225戸)の高層マンションが出来上がり、新しい住民が移り住むのを待つだけとなっています。これらの人々にとって、プラザ図書館が近隣情報の発信地になる必要があると考えました。

マンション住民以外にも、転勤者、新入学生など熊本での新生活が待っている人々、すなわち、図書館を利用していただける人々に対して、これから必要となる「生活情報」を、ホテルや地元のお店の人たちと一緒にになって、どんどん提供することにより、図書館を中継点として、地域社会の融和を図りたいと思っています。

地域社会との協働ということもプラザ図書館の基本

構想です。このほか、地元図書館、美術館、博物館をはじめ、周辺の施設でのイベントを、積極的に支援するなど、プラザ図書館は、駅前地域連携を推進していきます。

4・プラザ図書館とおはなしかい

図書館とおはなしかい(読み聞かせ)は、切っても切れないものです。全国各地の図書館では、工夫を凝らしおはなしかいを行っています。中には、地域で活動している読み聞かせを行うボランティア団体と協働して開催する図書館もあります。プラザ図書館では、これまでのところ全て職員の手で行っています。

プラザ図書館は、こども向けの読み聞かせだけではなく、大人の方々のために、読書会にも力を入れています。



おひぎにだっこのおはなしかい

① おひぎにだっこのおはなしかい

幼児向けのおはなしかいは、開館直後から毎週月曜日の午前中に行っています。読み聞かせを担当するのは、プラザ図書館の職員です。

読み聞かせを担当する者にとって、緊張するのは当たり前なのですが、お客様と身近に接するチャンスなので、担当者は懸命に練習し、ボランティアの方たちのようにいかないにしても、毎回、温かさを感じるおはなしかいになっています。



大人語り

手作り感溢れるおはなしかいです。

② 大人語り

最初の語りは「雪女」でした。

11月22日、19:30から始まった大人語りですが、予定の1時間が過ぎても熱心に聞き入っており、終了したのが21時を

回っていました。

プラザから熊本駅を臨める5階ホワイエでの大人のためのイベントは、全員大満足のうちに終了しました。

5・サイエンスカフェ開店しています

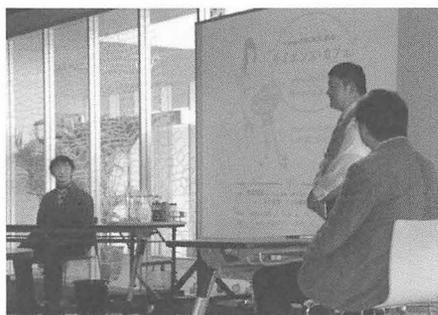
サイエンスカフェの歴史は、1997年から1998年にかけて、イギリス、フランスで開催されたのがはじまりといわれています。

その後、わが国でも開かれるようになり、いまでは多くの場所で行われるようになっていきます。インターネットにおける開催数は、100件を超えています。

プラザ図書館でも、1月29日にカフェを開店いたしました。第一回目のテーマは、「水の化学 ナノの化学」というものでした。

日頃、何気なく使っている水にスポットをあて、難しい話を、誰もが理解できるほど易しく解き明かしていただきます。

第二回目の開店は、2月10日でした。「本活、恋活、婚活」というテーマです。「え？これが何故サイエ



サイエンスカフェ(1)



サイエンスカフェ(2)

スなの？」と驚かれたかも知れません。東野圭吾氏の著作を持ち寄って、ミステリーの謎を解明するには、いかに科学が必要なかを、男性、女性の目から検証していくというもので、20代の男女の集いは、楽しく、そして健全に過ぎたのでした。

プラザ図書館のサイエンスカフェ、平成24年度は、独自色を出しながら4回程度の開催を予定しています。

6・プラザ図書館の展示と企画

プラザ図書館の展示スペースでは、これまでに「くまもとシリーズ」として、「くまもとの旅」、「くまもとの宝」という展示会を行いました。

この二つの展示会では、熊本に在住の方が編集した熊本各地の様々な観光情報、歴史・郷土情報を紹介した雑誌と明治時代からの少女雑誌の展示を行いました。また、同時に収集家ご本人による話を聞くことで、日本の文化、風俗の変化に触れることができました。

これらのことを初め、プラザ図書館の中には、図書館員各自がもつアイデアと知恵が溢れ出ています。アイデアの集まっている場所が、館内のカテゴリストリートと呼んでいる場所で、図書館員のセンスを表現する所となっています。表現を変えると、職員スタッフは友人でもあり知恵やセンスを競うライバルでもあるのです。

企画力、私はこれからの図書館にとって、一番重要な要素であると考えています。企画と広報、この部分が、今の図書館に、最も欠けているのではないのでしょうか。企画と広報、この二つの要素が正常に活動するかどうか

が図書館経営の分岐点です。その意味でも、基盤となる企画する力を常に意識させるため、職員間で競わせています。そのことが、手作り感が溢れる図書館に繋がっています。

7・おわりに

私はプラザ図書館を、熊本では初めての本格的な潜在型図書館とすることにしました。それぞれの人が持つ課題を、図書館またはビジネス支援センターで、豊富な資料を使い課題解を通して満足感を提供する図書館にしたのです。

プラザ図書館には、レファレンスデスクは置いていません。チーフ・ガイドをはじめとする図書館員全員が館内を巡回しながら、お客様への対応をしています。

知識より知恵をだせ。

一人一人が持っている知識を組み立てて、かつ効率的に活用するのが知恵だと思っています。いつもの仕事をいつも通りしては、いつまでたっても時間に追われるだけ。余裕を持つためには、いかに不必要なものを除

外するのか、ここで活用するのが知恵だと考えます。

図書館は運営ではなく経営である。

人的には適材適所、予算的には中期展望をもった計画の策定が必要だと思っています。毎年策定する蔵書構成案、選書計画案は勿論のこと、数年先を見据えた図書館行動工程表や各部署における数値目標の設定など、常に目標を作りながら業務を行なわなければ、図書館の将来を見通すことができなくなると思います。図書館の管



理職は常に時代を先読みしなければならないのです。

普段通りのルーティンワークだけではなく、新しい仕事をどんどん作らなければ、図書館は良いものにはならないというのが、私の考え方です。図書館は守りに入るのではなく、攻める体制が必要なのです。

TDLを見習え

施設が美しければ楽しさが倍増します。道路にゴミひとつ落ちていなければ、気分が落ち着きます。多少並ぶのを覚悟しても、TDLには何度も足を向ける多くの人々は必ずそう思っているはず。

美しい施設を保つには、職場で働いている人だけではなく、その施設を使うお客様の協力も必要となると私は思います。

また、東日本大震災の時は、液状化現象が発生する中、統制がとれた体制でお客様に対して避難誘導にあたり、負傷者を一名も出さなかったという見事なほどの実績を残しました。これは、日頃からの業務マニュアル整備、徹底した避難訓練の現れではないでしょうか。お客様に楽しさを提供する一番のものは、働く人が楽しみな

から働ける環境でなければ不可能であると思います。

プラザ図書館を引き受けることに対し、私はこの三項目を自らにノルマを掛けました。生まれたばかりのプラザ図書館ですが、私は、図書館員とお客様と一緒に、現在の良質な読書空間を維持するため、マナー向上に努めております。さらにきめの細かい高品質なサービスの提供をめざし、熊本から図書館の新しい風を送り続けたく思っています。

田中榮博(たなか・よしひろ)

くまもと森都心プラザ図書館館長。

二〇一一年研修旅行報告

熊本・福岡

広報委員会 岩野忠昭(白水社)

二〇一一年の人文会研修旅行は、前年の中国地方より更に西へ、九州の熊本と福岡を訪問いたしました。熊本は駅前に新しい図書館がオープンし、人文書の蔵書にかなり力を入れているということ、福岡は丸善博多店のオープンを受け、書店事情がどのように変わったのかを視察すること、そして九州地区の紀伊國屋書店各店との研修会、以上が研修旅行の主な目的でした。

初日、阿蘇くまもと空港に降り立った私たちは、紀伊國屋書店熊本光の森店、同熊本はません店、蔦屋三年坂店、喜久屋書店熊本店を見学し、最後に熊本市立図書館へ向かいました。紀伊國屋書店の二店舗は郊外のモール「ゆめタウン」内、蔦屋と喜久屋書店は熊本市の繁華街に立地というように、見学した四書店は二書店ずつ好対

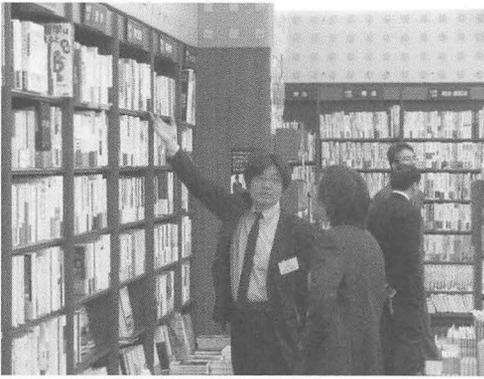
照な店舗でした。品揃え、売れ筋もそれぞれ異なりましたが、おおむね目ごろ訪問することの多い都内のターミナルに立地する書店と郊外の書店の特長と似た印象でした。

最後に訪れた市立図書館は、図書の閲覧、貸し出しだけでなく、市民のさまざまなニーズをサポートできるような設備も充実しており、私たちが子供のころに通った図書館とは隔世の感があります。また単行本も文庫・新書も一緒に並べるとい図書館ならではの配列は書店とは異なり、新鮮に感じるとともに、そこに書店の可能性を感じさせるものでもありました。夕方に訪問したのですが、ちょうど学校帰り、会社帰りの時間だからでしょうか、閲覧者・



利用者で賑わっていました。

二日目は、まずは九州新幹線で熊本から福岡へ移動し、紀伊國屋書店の福岡営業所、同福岡本店、丸善博多店、あおい書店博多店を視察・見学し、午後からは紀伊國屋書店九州地区各店との合同研修会に臨みました。九州の紀伊國屋書店各店は、店の坪数や立地条件もさまざままで、一概に人文書、専門書と言っても、お店の各担当の方のイメージするものにも違いがあるようでした。店の立地



が異なれば客層も異なるわけで、その店の客層にあった品揃えを目指すのは当然でありましょうが、その一方で人文書・専門書もしっかり揃え、少しずつでも売り上げを伸ばしていきたいという担当の方の意欲が感じられました。専門書の客をつかむのは一朝一夕にいくものではありませんので、これから腰を落ち着けて取り組んでいくことになりそうですが、そういう書店の取り組みに対して人文会としてどういうサポートができるのか、こちらも大きな宿題を持ち帰ることになりました。

二日目の晩は、その紀伊國屋書店の方に加え、見学させていただいた福岡の書店の方々をお招きしての懇親会。研修会のような改まった席ではなかなか手も上げづらい、意見を言いにくい空気がありますので、懇親の場でさらなる意見交換や懇親を深めることができましたと思います。

三日目にして研修旅行最終日は、まず長途、紀伊國屋書店久留米店へ赴き、とんぼ返りで福岡の九州大学生協文系店、ジュンク堂書店福岡店、紀伊國屋書店ゆめタウン福岡店、フタバ図書TERRA福岡東店を視察・見学しました。ジュンク堂が

市内に立地する他は、書店はすべてショッピングモール内に立地し、客層や店の雰囲気も初日のモール内書店と似た感じでした。

以上の研修旅行を振り返ると、ひたすら郊外のショッピングモールの中を歩いてきた印象が強くなります。それは、ある程度の量の人文書を揃えられる規模の書店が郊外のモールに出店しているからでありますが、逆に言えば、そのような大型書店は街の中心部よりも郊外のモールに出店しやすいからだと思います。郊外に大型のモールができ、古くからの街の中心部の商店街が寂れるという状況は九州に限りませんし、今回訪問した熊本、福岡はむしろ中心街の賑わいが残っている都会です。それにもかかわらず、これだけショッピングモールがオープンしているのは政策的な面もあるとはいえ、各書店の個性発揮という意味ではどうなのかと思います。

郊外のモールは、主な客層はファミリー層で、若い夫婦に子どもという典型的な家族が土日に買い物に来るといふパターンが大きな比重を占めています。正直なところ、人文書、専門書の購入者という面では最も遠い存在と言えます。ただ、平日の午前中などを中心に比較的年

齢層の高い来客もあるようですし、若い夫婦が全く人文書を買わないわけでもありません。テレビや新聞書評などで話題になったものにはそれなりに関心が高まるようですので、そこらあたりを手がかりに人文書のマーケット拡大を図ればと思います。では具体的に人文会として、出版社としてどのような提案やサポート、フォローができるのか。今回訪れた九州地区に限らず全国的な課題だと思えます。その一方、これまでの人文書売り上げの主力であった街の中心部の書店においても、客足を郊外のモールに奪われている全国的な流れの中で、いかにこれまでのアドバンテージを活かし、増売に繋げていけるか、こちらも大きな課題であります。



人文会からのお知らせ

「人文書販売の手引き」が好評をいただいています。

人文会では、昨年2011年10月に「人文書販売の手引き」を刊行いたしました。

マニュアルの作成は人文会にとって長年の課題でありながら手つかずの状態になっていました。しかしながら最近、「初めて担当するジャンルが人文」という方が増えたこと、また書店員としては中堅といつていいほどのキャリアの持ち主からも教えを請われるケースが多くなったこともあり、マニュアルを作成する必要性を強く感じるようになりました。昨年、販売・企画委員会主導のもとに多くの皆様の協力を得たプロジェクトをスタートさせ、ジャンルに沿った「人文書販売の手引き」を遂に完成させることができました。

初級者から中級者、またベテランの方にとっても販売につなげるためのヒントが詰まっていると自負しております。一人でも多くのご担当者にご使用いただくことで、店頭活性化のお役にたつことができれば幸いです。

実際の棚づくりに役立つ人文書各ジャンルの棚図面を収録。

◎品揃えに使える「基本図書700」も収録。



The image shows three pages from a book catalog. The top page is titled '哲学・思想' (Philosophy & Thought) and contains a grid of book titles and authors. The middle page is titled '基本図書700' (Basic Books 700) and also contains a grid of book titles and authors. The bottom page is partially visible and shows more book titles. The catalog is organized into columns and rows, with book titles in the top row and author names in the bottom row of each cell.

人文会会員名簿

〒113-0033 文京区本郷5-32-21 みすず書房内

2012年4月現在

社名	担当者	〒	住所	電話	FAX
大月書店	駒谷 光彦	113-0033	文京区本郷2-11-9	3813-4651	3813-4656
御茶の水書房	平石 修	113-0033	文京区本郷5-30-20	5684-0751	5684-0753
柏書房	富澤 凡子	113-0021	文京区本駒込1-13-14	3947-8253	3947-8255
紀伊國屋書店	三橋 直也	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	大野 友寛	108-8346	港区三田2-19-30	3451-3593	3454-7029
勁草書房	吉武 創	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春秋社	片桐 幹夫	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶文社	川上 勝広	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠信書房	新保 卓夫	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
創元社	華園 斉	162-0825	新宿区神楽坂4-3 煉瓦塔ビル	3269-1051	5229-7139
筑摩書房	三澤 宏幸	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	橋元 博樹	113-8654	文京区本郷7-3-1	3811-8814	3812-6958
日本評論社	朝倉 哲哉	170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白水社	岩野 忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平凡社	根井 浩一	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	古川 真	102-0073	千代田区九段北3-2-7	5214-5540	5214-5542
みすず書房	田崎 洋幸	113-0033	文京区本郷5-32-21	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	三上 直樹	101-0052	千代田区神田小川町2-4-17 大宮第一ビル6F	3296-1615	3296-1620
未来社	水谷 幹夫	112-0002	文京区小石川3-7-2	3814-5521	3814-8600
吉川弘文館	片山 伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

会長	菊池明郎(筑摩書房)
代表幹事	田崎洋幸
会計幹事	平石 修
書記幹事	新保卓夫

(◎委員長(幹事) ○副委員長)

販売・企画委員会	◎橋元博樹	○華園 斉・富澤凡子・根井浩一・三澤宏幸・三橋直也
調査・研修委員会	◎吉武 創	○朝倉哲哉・川上勝広・片桐幹夫・古川 真・水谷幹夫
広報委員会	◎大野友寛	○三上直樹・岩野忠昭・駒谷光彦・片山伸治

人文会ホームページ <http://www.jinbunkai.com>

人間の生は、いつ悼まれ、またいつ蹂躪もやむなしとされるのか? 『ジェンダー・トラブル』の著者が、暴力を批判し、それを克服する理論を打ちたてようとする。

四六判 ● 3045円

——生はいつ嘆きうるものであるのか

戦争の枠組

ジュディス・バトラー 著

清水晶子 訳

筑摩書房

サービスセンター ☎048(651)0053
http://www.chikumashobo.co.jp/

PTSDの伝え方

トラウマ臨床と心理教育

前田正治・金吉晴編 PTSDやトラウマ反応について患者やクライアントに伝えることの意味、伝え方や伝えることで引き起こされる変化などの心理教育の方法と解説。 3780円

高齢者動作法

中島健一著 本人の気づきや努力に基づき能動的に活動の仕方を変えることを支援する動作法。この動作法を高齢者に安全に適用する方法を、図版37点、写真92点を用いて詳細に解説した実践書。 2625円

絵本と解説でこころの問題を解決 子どもの心理臨床 [全9巻/18冊]

M.サンダーランド著/N.アームストロング絵
解説書：関口進一郎監訳/絵本：森さち子訳
いじめ、喪失、恐怖、不安、怒りなど、現代の子どもが抱える心の問題をテーマ別に絵本で取り上げ、その対処法を紹介した心理治療シリーズ。 B5判・函入揃価格31,500円

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6
TEL.03-3946-5666 (税込)

古語大鑑 全4巻

*編集委員代表 築島 裕
*編集委員 峰岸 明 白藤禮幸 坂梨隆三 沼本克明
月本雅幸 山本真吾 肥爪周二

【第1巻】2011年12月発売
B5 判上製・函入・936頁
39,900円 (税込)



最新の学術研究の成果を十分に盛り込み、従来の語釈や語源説を全面的に再検討した比類なき、奥深い古語辞典。

◆内容見本贈呈

東京大学出版会

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1
TEL 03-3811-8814 http://www.utp.or.jp/

学校制服の文化史

日本近代における女子生徒服装の変遷
難波知子著 従来の学校観に変換を迫る、清新な制服史論。毎日新聞ほか書評多数。
5040円

不思議で美しい石の図鑑

山田英春著 科学的鉱石図鑑とは全く異なる、奇蹟の模様・色彩で編んだ美石図鑑。
3990円

明朝活字の美しさ

日本語をあらわす文字言語の歴史
矢作勝美著 最も多用された活字書体である明朝体のすべてを描く、畢生の大著。
16800円

写真の読み方

初期から現代までの世界の大写真家67人
I・ジェフリー著 写真史界の第一人者による、ものすづく面白い写真の読み解き方。
3990円

創元社

大阪市中央区淡路町4-3-6(税込備)
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111
東京支店 Tel.03-3269-1051

● 平凡社ライブラリー

大森荘蔵 セレクション

飯田隆・丹治信春
野家啓一・野矢茂樹 編

〈大森哲学〉を知る、
最強の編者による、
最良のアンソロジー。
戦後日本の最もオリジナルな哲
学〈大森哲学〉。そのもとで学ん
だ4人の哲学者が、大森哲学の
エッセンスと、その思考の軌跡を
鮮明に示す論考を編む。4人
による巻末の座談会も必読！

● 1,785円(税込)

平凡社 〒101-0061 東京都千代田区神田神保町3-29
TEL 03-3230-6572 FAX 03-3230-6587

国家と自由・再論

樋口陽一・森英樹・高見勝利
辻村みよ子・長谷部恭男 編
18人の執筆者が、憲法学の可能性を探るといっ、かつて
共有した問題関心からの新稿を寄せる。 □5775円

杉山登志郎著作集3

児童青年精神医学の新世紀
杉山登志郎 著 □3360円
こゝ10年あまりの子ども虐待関連論文など11本を収載。

● 日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4
TEL: 03-3987-8621 <http://www.nippyo.co.jp/>

法政大学出版局

<http://www.h-up.com/>

デイヴィッド・ヒューム 人間本性論

第1巻 知性について

木曾好能訳 人間の営みの柱をなす科学
や道徳が理性に基づかないことを徹底的
に示し、広範な精神領域を考察した古典。
A 5判・上製・666頁/16,800円

第2巻 情念について

石川徹・他訳 人間本性における理性の
働きを限定的に捉え、行為の原動力を情
念とし、4つの情念のメカニズムを解明。
A 5判・上製・386頁/10,290円

〒102-0073 東京都千代田区九段北 3-2-7
☎ 03 (5214) 5540 / 表示価格は税込です

現実界の探偵

文学と犯罪

作田啓一 著 人間を犯罪へと駆り立てる衝動とは何
か? 大澤真幸氏推薦! 2730円

トクヴィルの憂鬱 フランス・ロマン主義と
世代の誕生 2730円

高山裕二 著 新しい時代を生きた若者の昂揚と煩
悶を浮き彫りにする。 2730円

ナチ戦争犯罪人を追え

ガイウルターズ 著 「ナチ・ハンター」による執念の
高機進訳 追跡劇の真相とは? 3990円

白水社 東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
<http://www.hakusuisha.co.jp/> ※価格は税込

同時代史考 政治思想談義

加藤節著 ◆2310円

ポイエーシス叢書60

翻訳のポイエーシス

他者の詩学

湯浅博雄著 ◆2310円

石川真生写真集

日の丸を視る目

石川真生写真 ◆5040円

枢機卿ベツラルミーノの手紙

科学思想史への一つの扉

西藤洋著 ◆5040円

出版文化再生

あらためて本の力を考える

西谷能英著 ◆3990円

未来社

※表示価格は税込
〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
tel.03-3814-5521 www.miraisha.co.jp/

ディアギレフ

芸術に輝けた生涯

スハイエン「火の鳥」春の祭典をロシア・パレエ団で初演。二十世紀芸術を変えた魔術師の伝記。鈴木昌訳 五六〇円

ドビュッシーをめぐる変奏

シエフネル 文学、演劇、美術との関係を詳述しドビュッシーの本質と革新性に迫る。待望の邦訳。山内里佳訳 三九〇円

人生と運命

2

グロスマン 文学に結晶した独ソ戦の内実。ソ連時代に抹殺され難る。レヴィナスが絶賛(至)巻。齋藤敏一訳 望三三〇円

ニールス・ボーアの時代

2

バイス コペンハーゲン精神の形成から、核をめぐる情報公開の提唱までの後半生。全二巻完結。西尾成子他訳 五六〇円

みすず書房 (税込)

東京本郷5-32-21 <http://www.msuz.co.jp>

ミネルヴァ日本評伝選



原阿佐緒

うつし世に女と生れて

秋山佐和子著 女として母として、歌人として精一杯生きた生涯を遺された四千首からたどる。3675円

斎藤茂吉 あかあかと一本の道とほりたり
品田悦一著 国民歌人の大いなる虚像と実像。3150円

種田山頭火 うしろすがたのしぐれてゆくか
村上 巖著 俳壇に破天荒な軌跡を残した俳人。2940円

高村光太郎 智恵子と遊ぶ夢幻の生
湯原かの子著 その生涯と内面の葛藤。2310円

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL075-581-0296 価格税込み/宅配可

石橋湛山論

上田美和著

言論と行動

戦前は言論人、戦後は総理大臣。「未完の可能性」を示した、二〇世紀日本の傑出した個性に迫る! 3990円



皇軍兵士とある残留

林 英一著

インドネシア独立戦争

両国の架け橋として生きた戦後を重点に描き、現代史に新たな光をあてる注目作。(小原英二氏推薦) 2310円

吉川弘文館

価格税込

東京都文京区本郷7-2 / 電話 03-3813-9151

社会主義の展望と福祉国家の位置づけ

マルクス主義 と福祉国家

聴濤弘著 多様な福祉国家論の論点を整理し、マルクス主義の社会発展の展望における福祉国家の位置と、新しい社会システムを探求。46判・2100円

「過去」からの警告

問いつづけてきた 原子力

『技術と人間』論文選 1972-2005

高橋昇・天笠啓祐・西尾漢編 1970年代から原子力開発に対し一貫して反対の論陣を張ってきた雑誌から重要論文を精選・収録。46判・5460円

東京文京 大月書店 電話03—
本郷2-11 3813-4651
メールマガジン配信中(詳細はHPで)税込

●ありのままの光景が暗示するフクシマの(未来)

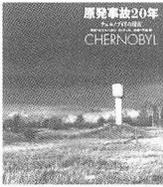
原発事故20年

チェルノブイリの現在

ビエルバオロ・ミツテイカ▼著
児島修▼訳

史上最悪の事故から四半世紀後の現実を静かに物語る写真群。日本人にとっての未知の世界の全貌が明らかとなる。

B5判変型240頁・3150円



柏書房 東京都文京区本駒込1-13-14
Tel.03-3947-8251(価格税込)

在朝鮮人女性による「下位の対抗的な公圏」の形成

徐阿貴著 五六七〇円

大阪の夜間中学を核とした運動

福祉国家再編の政治学的分析

加藤雅俊著 六九三〇円

オーストラリアを事例として

鏡の中の自己認識

東郷和彦・朴勝俊編著 四〇〇〇円

ヴェイクトリア時代における

フェミニズムの勃興と経済学

清水 敦櫻井 毅編著 四七二五円

御茶の水書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-30-20
電話03-5684-0751
http://www.ochanomizushobo.co.jp/

9.11——その時はじめて世界はイスラームに目を向けた

イスラームから見た 「世界史」



ムスリムたちは、自らの歴史をいかに語り伝えてきたのか。歴史への複眼的な視座を獲得するため、もうひとつの「世界史」。

タミム・アンサーリー / 小沢千重子訳 ▼3570円

紀伊國屋書店 出版部 東京都目黒区下目黒3-7-10
http://www.kinokuniya.jp/ (営業)TEL:03(6910)0519 税込価

2012年4月30日発行 年3回発行 第112号

発行所 人文会 みすず書房内

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21

編集協力 アジュール・プロダクション

印刷 中央精版印刷株式会社

〈非売品〉